

こ あ い さ つ

学年末で成績処理、卒業式や新年度の構想などでお忙しいことと存じます。各学校ならびに会員の皆さまにとり本年度は幸いな年であったことを心から念願いたしております。

この教育研究会も、今年の計画した仕事をほぼ完了することができ、会報によってお知らせできる運びとなりました。ご承知のように会の事業の二つの柱を研究大会の開催と研究紀要の刊行におき、教科部会や地方支部の活動はそれぞれの自由な運営にお任せしております。研究大会は本年1月10、11日に開催されましたが、別記のように非常な盛会裡に終ることができました。全体の講師としては国立教育研究所長の平塚益徳氏を予定し、昨年7月からお話をすすめてご承諾をえていたのですが、予算交渉の都合上どうしても来道不可能という電話を年末ぎりぎりのところで受けて、非常にあわてました。しかし東大教授の沢田慶輔氏にお願いでき、研究会にふさわしい実のあるお話をお聞きすることができました。2日目の分科会もそれぞれ相当の収穫をあげることができたように思います。まだまだ十分というわけにはいきませんが、前2回に比しては格段の進歩があったと思います。会員の皆さまの、また各教科部会の責任者の方がたのご苦心がだんだんと実つていくことには敬意を表さずにいられません。

研究紀要も年度内にはお届けできるようにと事務局では馬力をかけております。自由な寄稿もふえたために当初予定したよりも部厚いものになりました。ぎりぎりの予算でやっている会としては大変なことですが、自由なそして自発的な研究は尊重して参りたいと思います。事務局ではうれしい悲鳴をあげているのが実状です。なお会員も昨年より数百名増加しました。各地区の役員の方がた、また校長先生がたの熱意あるご援助に対してまことに感謝の気持で一ぱいで、拙ないことばで十分いつくせません。

会の事業をもっと広げ、各教科部会ごとにあるいは支部ごとに有効な活動をしていただけるようになるためには、何としても会員数の増加が必要です。会費収入に見合って補助金も多くなり総体の収入がふえるわけです。今後ともこの会の趣旨や性格を正しく理解していただき、会員をふやしていただきたいものです。

ともあれ発足以来3年、会の基礎が固まったという感じですが、この基礎に立って今後この会がさらに飛躍的に発展し、北海道の高校教育推進の原動力になっていただきたい。これがわたしの心からの願いであります。会員の諸氏の一そうのご自愛とご健斗を祈りごあいさつといたします。

会 長 梶 浦 善 次

☆ 第3回教育研究大会特集

大会前日、札幌地方に新年二度目の豪雪があって当日の開会はどうなるものかと気をもんだ。しかし、それも杞憂に過ぎず、この日を期待して全道各地から集まった1,400名の先生方でさすがに広い静修高校大会場も埋められ、定刻第一日の日程に入った。

ただ、当初予定されていた講師の平塚益徳氏が緊急の所用でこれなくなり、高校教育再編成の気運がたかまりつつある昨今、その中心的な存在である先生の講演を聞く機会を失ったのは誠に残念なことであった。

大会日程は次のとおりであった。

第1日・1月10日(月)

9:00—9:30 受付

9:30—9:50 開会式

10:00—12:30 講演

講師 東大教授 文学博士 沢田慶輔氏

12:30—13:30 休憩

13:30—15:30 研究発表

第2日・1月11日(火)

9:00—12:00 分科会

12:00—13:00 休憩

13:00—15:00 分科会

この大会を振り返ってみると、数多くの収穫が得られたが、過去2回の大会と比べて、次の二点は特筆すべきものであったと考える。

その一つは、大会参加数の飛躍的増加である。第1回大会300名程度であったものが幾何級数的に伸び、本道の研究会でもかつてみられなかった研究大会にまで発展したことである。しかもそれがわずか3回にして達成されたことはまったく驚くべきことである。

これも結局のところ、研究会の地道で着実な歩みが時間の経過と共に先生方に深く理解されてきたからにほかなりません。

次に今回の大会での特色として教科分科会の充実があげられ、これが特色の第二の点である。

国語、数学、英語、家庭の四分科会では、それぞれの教科での権威ある講師を招いて終日熱心な研究がなされた。

なかでも、数学部会では講師の模範授業がなされ、本道の高校の研究会として最初の画期的な試みとして注目を浴び、参加の先生方は深い感銘を覚え多くの収穫をえられたことと思う。また、英語部会では、スライド利用による講師の講演が行なわれるなど、これまで全体部会に比重がかかった感じもあったが、これで全体部会、教科部会とがバランスのとれたものになり、その意味で研究大会の方向づけに一つの指針を与えることになるのではなからうか。

ともかく無事に、成功裡に第3回教育研究大会を終

了することができたことを先生方と共に喜ぶと同時にこれまでの一応の成果を基礎として、今後更に本会が発展することを念じ、各方面の深甚なご協力を願いたいと存じます。

○ 講演要旨

「考える力をもった人間」を育てるにはどうしたらよいか。現在高等学校の教育課程を80%程度消化している生徒が全体のわずか30%程度にすぎない点から考え合わせてみると、今後教育課程の改訂に重要な問題を投げかけている。断片的な多くの知識を羅列して生徒に与えるのではなく、「基本的な事項を精選」して「構造化」させる必要がある。この構造化の中心になるものは、最も典型的なものを適出してそれに関連する基本的な諸概念を正確に理解させ、その諸概念の相互関係を把握させなければならない。これを学習指導の場でみると、単に与えられたものを受動的に学習するのではなく、主体的に発見的に学習させる方向に導いていかなければならない。

又個々の生徒の実態をみても、年々学力差が著しくなり、非行化する少年が増加するのは学校教育の編成の有り方に問題があると云われているが、現実に学力に差があり、高等学校の教育に適応出来ない生徒がいるという現実から出発して、高校教育の再編成を考えなければならない。生徒の教育課程からの脱落が学校教育からの脱落になることを編成の上では防がなければならない。能力別の教育が差別教育であって、民主主義の原理に反するとして斥けられるだけでは十分に教育を進められない。抽象的な思考力の弱い生徒に対しては、指導内容や指導方法(例えば視聴覚教具を利用するなどして)を変えることによって、市民として必要な出来るだけ高い知識を理解させるようにしたい。高校教育が次第に technician になる教育と、craftsman になる教育に分れる方向も、この面からの理解が必要である。技能的熟練も知的能力と同じく青年期に顕著な発達をするので、一般教養と同じく技能の熟練の教育をおろそかに出来ない。一般にコースや科目に対して、価値的貴賤や上下の伝統的考えが残っていて高等学校のコースの多様化に批判があるが、そのような伝統的な考えを社会的にも是正しなければならない。

我々は生徒の現在おかれている現実から出発して、その現実をより良い方向に進めて行く最善の努力を、教育の現場でして行かなければならないのではないだろうか。(文責・本部編輯)

△ 国語部会

○ 研究発表——

(一) 「現代国語と文法教育」池田敬(札幌成)氏；日本語そのものに対する自覚に基いて、文語文法のやきなおしの口語文法ではなく、文論、文章論に基いた指導を体系的に教え、ことばへの感覚を育て

べきである。

ロ 「古典に於ける文法指導と問題点」一文論の指導を中心として一水谷郁夫（札幌）氏；機能文法が現代の大勢であるが、この先の体系化に対する示唆が行き詰っている現状において、文に於ける敘述の中心をつかむことから出発して、指導の時期と内容に考察を加えた。

- 講演——「文法教育の諸問題」東京教育大学教授文学博士・馬淵和夫氏；文法教育に於ける二つの主張、文法とは何か、文法教育の目的、それぞれの文法論の批判等についてのべられ、結論として中学で簡単な文法知識を与え、古典乙Ⅰ程度は中学におろして高校Ⅰ、Ⅱ年では解釈文法をⅢ年ではⅠ時間程度を人文科学の一部としてその文法を体系的に考えさせるようにしたらとのべ、参加者に多大の感銘を与えた。

△ 社会部会

共通テーマ「社会科教授過程の構造化」

- 歴史部会；個別的な雑多な歴史事象を構造的に把握し、認識を本質化させる理論と実践を中心課題とし、二川義昭（旭北）氏は実例をイギリスの絶対主義に、綾井健二（千歳）氏は明治維新に、柳沢二郎（札幌）氏は中世封建制度に、それぞれ独自の展開例を豊富にあげて発表された。討議は構造図作製における核の設定、史観の問題、図式に伴う弊害の吟味、記号の技術、構造化実践における客観化等が問題になり、この問題を深めて行く研究グループを作ることが提案され賛同した。
- 倫理・社会部会；構造化の問題を田中照（函西）氏は、授業の分析から「人生観、世界観」の学習に於いて先哲の基本的な考え方や、生活の現実の人生や悩みと結びつかない点を如何に克服するかの説明と試案が提出され、白石文男（室東）氏は内容のみではなく、指導の技術面の反省を加え、生徒の主体性を生かした授業構造化が考えられるべきであるとのべられ、又小川純一（帯柏）氏は構造化を教材構造と学習過程構造の二つの側面から論点にせまり、生徒の理解を深めて行こうとする意図を論じ、江口弘（羽幌）氏は授業の二年間の反省、生徒の意識的実体から集約された目標を設定し、「現代社会と人間関係」の単元を問題提起として、方法として生徒の自主的活動をすすめるべきと論じた。
- 地理部会；増田忠二郎（札幌）氏は「高校地理における北海道の取扱いについて」の発表の中で、体系的地誌的な扱いの方が生徒に理解しやすく、又郷土地理との関連において、その取上げる範囲、野外調査の学習効果等についてのべた。大森好男（札幌）氏は「統計学習」について統計資料の分析比較によって学習効果をあげ統計についての理解や親しみを増すことが出来るとのべた。前田武男（札幌）氏

は「学習指導に法則性」という点から論じ例を自然環境のうちの地形にとって説明した。

社会科部会全体は、参加者の日頃の教授実践と結びついた論点に討議が集中し、一その成果を収めた。

△ 数学部会

テーマ「教育課程における新教材の取り扱いについて」

9.00—9.50 数Ⅰ（論証教材）模範授業

10.00—11.00 数ⅡB（ベクトル）模範授業

授業者 慶応大学教授田島一郎氏

11.00—12.00 研究発表

12.00—13.00 休憩

13.00—15.00 講演

発表者

石川 成平氏（旭東）教材の取り扱い

対馬 仁郎氏（札幌）ベクトルによる問題解決

以上の内容で数学部会が開催されたが、田島一郎氏による模範授業は、新課程での授業が各学校で一通り終って、新教材の取り扱いにおいて深く反省を重ね、今後の学習指導にいかしていく上で参考となるところ多く、また、授業の展開でも、十分慣れ切っていない分野だけに、その方法に学ぶべき点が多々みられた。

授業内容は数Ⅰでは、命題の構造で、必要条件と十分条件、および必要・十分と集合の考え、数ⅡBでは直線のベクトル方程式である。

田島先生のユニークでユーモアを交えた授業は、こういった授業が本道において最初で兩期的なだけに、300名を越える先生方を完全に魅了し、授業者、生徒、参加者がまさに一体となった、熱のこもった有意義なものになった。

引き続いた石川氏、対馬氏の研究発表もテーマに即した貴重なもので、将来に生かして効果の期待できるものであった。

次に田島先生の集合の概念を中心とした有益な講演があり、全体として厚みのある研究会であった。

最後に、従来の研究会ではみられない新形式の部会であったが、今後の数学部会運営方法のあり方を考えてみると、十分意義があったこともつけ加えておく。

△ 理科部会

共通テーマ「理科学習指導の近代化」

- 物理部会；伊良原嗣雄（旭西）氏は「講義実験に対する私案」の発表の中で、スライドを豊富に利用した各種実験を試み、従来教師実験についてこの面の研究が進んでいなかっただけに、自作教材の発表は非常にすぐれていると認められた。又昨年の会議において強力な要請のあった理科実験書（生徒用）が本年4月に全道の物理担当者の協力で編集され完成の予定であるが、内容の検討を加え、今後の研究に

より一層充実したものになりたい。

○化学部会

1. 本道独自の化学実験書の作成の経過と予定についての説明、中野茂(札幌)氏
2. 教科書に示されている実験をするために放課後や休憩の利用。
3. 実習助手、設備等の予算を関係方面に要望。

○生物部会

- ① 生化学的な面の扱い方
- ② 生物の分類と系統の指導法
- ③ 生物の単位は内容を理解させるに困難
- ④ 自作のスライドの活用と交換
- ⑤ 生物の実験書(20項目配当30時間)は北海道独自のもので生命現象を理解することを考慮してある。

○地学部会

- ① 地学の実験は地学への興味をもたせる自然への注意や判断力を養う。
- ② 実験は2単位の制約もあって困難だが工夫の余地がある。
- ③ 地学実験書は道内独自の編集の仕方をしたもので利用して戴きたい。

△保健体育部会

現段階ではスポーツテストが未完成であるので、今後の研究により体力診断テスト、運動能力テストの実施時間、位置づけ方法等を考え、体力の向上をめざして行きたい。来年度の事業として次のことが決定された。

1. 道内から講師を
2. 研究発表者(旭川、空知、十勝の各地区から1名づつ)
3. テーマの設定「球技の中から1つ選んで効果的な指導段階を研究する」という内容を個人技能、集団技能をゲームの中でどう活用するか、学習の中で体力を高める方法、学力テストの分析と問題点の検討と対策

△英語部会

「視聴覚教具の利用による学習の近代化」というテーマで中津川皓(小清水)氏はN・H・Kの録音テープの利用によって、音声指導から生徒の興味づけに成果を上げた例を発表され、九津見明(千才)氏は教科書のソノシート等の利用を中心として適切な Teaching Plan の設定及び授業の展開例を示された。又、山崎滋樹(札幌)氏は Hearing Test の分析の上で音声指導の困難点、問題点を示し、今後の組織的な指導に重点をおくべきであるとのべた。又、西田等(札幌)氏は旭丘高校の語学実験室の利用の反省と、今後の活用の有り方について試案が発表された。福原俊明(札幌)氏は Some Phonetic Problems として

- (i) Phonemics と Phonetics の相違

(2) allophone

(3) Stress と intonation

等をあげ、日米音韻体系の相違を認識することが大切であると指摘された。

午後は、北大教授 Allan George Barr 氏の The Introduction to Oscar Wilde's Play The Importance of Being Earnest という題で講演があり、非常に格調の高いものであったが、ユーモアたっぷりの話しぶりにすっかり魅了され、その後でその作品の天然色映画をみた。

△芸術部会

加藤恒三(札幌)氏は音楽Iの教科書を検討し分析した結果、今後内容に新鮮味のある実状に応じた興味のある曲をのせるように望み、今後の教科書のあり方として要点を上げてのべた。

△農業部会

午前は、北大教育学部助教授、布施鉄治氏の講演で現下の変動する農村社会の実情を分析し、これに対応する農業教育の在り方の重要性をのべられて深く感動した。

午後、朝日博夫(南幌)氏、堀之内清志(音更)氏の研究発表で「普通教科と農業教科との関連」について、基礎的知識技術はより構造的な応用力を与える範囲に止め、農業の概念に汎論的なものが必要とし、普通教育は農業教育を柱として、精選した内容を決めるように、又、職業的教養を高める為に、一般教養の協働と重要性が力説された。

△工業部会

工業教育の近代化に対して、工学の面からみた教育法の研究の現状紹介と、工業部会の今後の運営の有り方について協議した。

△商業部会

志尾穆(浦河)氏の「財務仕訳帳について」吉室俊行(小樽)氏の「ファイリングシステムの——指導法、実物教材による指導」小森文夫(芦別啓南)氏の「法解釈学への反省」の研究発表があって、商業教育の新しい分野の開拓に貢献があった。

△家庭部会

札幌南高から1年生のアンケートをまとめた資料を中心にして、高校家庭一般の指導方法の問題点を提起され、午後、藤女子短大教授、鈴木ヨシ氏が「家庭科教育と家政学との関連」について講演され、そのなかで家庭科は、自然科学と社会科学の基礎に立つ総合科学であり、かつ、実践科学である点を強調された。

(各部会記録より集録)



こ あ い さ つ

学年末で成績処理、卒業式や新年度の構想などでお忙しいことと存じます。各学校ならびに会員の皆さまにとり本年度は幸いな年であったことを心から念願いたしております。

この教育研究会も、今年の計画した仕事をほぼ完了することができ、会報によってお知らせできる運びとなりました。ご承知のように会の事業の二つの柱を研究大会の開催と研究紀要の刊行におき、教科部会や地方支部の活動はそれぞれの自由な運営にお任せしてあります。研究大会は本年1月10、11日に開催されましたが、別記のように非常な盛会裡に終ることができました。全体の講師としては国立教育研究所長の平塚益徳氏を予定し、昨年7月からお話をすすめてご承諾をえていたのですが、予算交渉の都合上どうしても来道不可能という電話を年末ぎりぎりのところで受けて、非常にあわてました。しかし東大教授の沢田慶輔氏にお願いでき、研究会にふさわしい実のあるお話をお聞きすることができました。2日目の分科会もそれぞれ相当の収穫をあげることができたように思います。まだまだ十分というわけにはいきませんが、前2回に比しては格段の進歩があったと思います。会員の皆さまの、また各教科部会の責任者の方がたのご苦心がだんだんと実つていくことには敬意を表さずにいられません。

研究紀要も年度内にはお届けできるようにと事務局では馬力をかけております。自由な寄稿もふえたために当初予定したよりも部厚いものになりました。ぎりぎりの予算でやっている会としては大変なことですが、自由なそして自発的な研究は尊重して参りたいと思えます。事務局ではうれしい悲鳴をあげているのが実状です。なお会員も昨年より数百名増加しました。各地区の役員の方がた、また校長先生がたの熱意あるご援助に対してまことに感謝の気持ちで一ぱいで、拙ないことばで十分いつくせません。

会の事業をもっと広げ、各教科部会ごとにあるいは支部ごとに有効な活動をしていただけるようになるためには、何としても会員数の増加が必要です。会費収入に見合って補助金も多くなり総体の収入がふえるわけです。今後ともこの会の趣旨や性格を正しく理解していただき、会員をふやしていただきたいものです。

ともあれ発足以来3年、会の基礎が固まったという感じです。この基礎に立って今後この会がさらに飛躍的に発展し、北海道の高校教育推進の原動力になっていただきたい。これがわたしの心からの願いであります。会員の諸氏の一そうのご自愛とご健闘を祈りごあいさつといたします。

会 長 梶 浦 善 次